



石造文化の文様

近江は中世石造文化の一中心地です。湖国に現存する鎌倉・南北朝・室町の各時代にかけての石造遺品は、造立年代の判明しているもので310点に近い数になります。これは、天台宗の造塔活動が盛んであったこと、湖東から湖西地方に花崗岩石材が多く産出したことが主な原因です。

これら石造遺品の中で、宝篋印塔・宝塔の基礎に、蓮の花、葉の文様や孔雀の文様が彫られています。この文様が近江に集中し、古い遺品に多いことから、近江式文様と呼ばれています。

この文様は近江で発生し、京都・大阪・兵庫・岡山・広島・佐賀の各府県に伝わり、ほとんど西に向っています。関東方面には見られません。

文様の種類は次の4種類があります。

三茎蓮華 開蓮華 散蓮華 孔雀

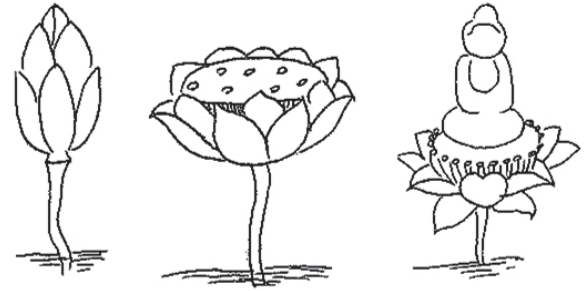
これらの文様の分布とその伝播を知ること、近江の石造文化を理解する上に、大切なことです。

ハスの花と仏 ハスの花はインドでは清浄な花とされ、中国では吉祥花といわれています。あの泥沼から赤・白の花が咲きますから、神聖な植物として尊ばれてきたのです。

水面からハスのつぼみが伸び出てきました。ハスの弁が静かに開きますと、ハスの実がみえます。実の上がふくらみ、これが仏の姿になるといわれます。(第1図)

このように、ハスと仏教は密接な関係を持ち、墓塔のあちこちにもハスの装飾が見られます。

三茎蓮華 仏教では、ハスのことを“蓮



第 1 図

華(れんげ)”といえます。蓮華のはなびらや葉を部分的に図案化しています。

中央と左右に三本の茎を出し、茎の先につぼみがあるほか、花または葉もついています。茎が三本あるので、“三茎”の名がつけました。なかには二本・五本などあり、“二茎蓮”“五茎蓮”と呼んでいます。

いれものの花瓶があるもの、ないものなど、さまざまなデザインがあります。

三茎蓮華で最も古いものが、大吉寺宝塔(浅井町野瀬・建長3年(1251))で、三茎蓮華の他に一茎蓮華を現わす文様、ついで松尾寺九重塔(米原町上丹生・文永7年(1270)シリーズ6号)図①では、一対の花をそなえ、花瓶は大きく三茎ともつぼみです。

このようなデザインからさまざまな文様が生まれました。

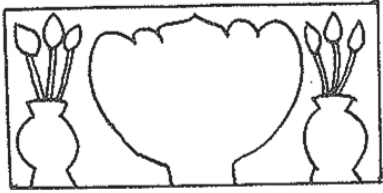
花瓶をあらわすもの 図②

花瓶をあらわさないもの 図③

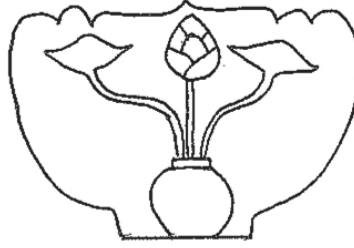
花瓶のあらわし方も種々あり、完全な形のものや上半分のみをあらわすものがあります。図④ また、特殊なものに角型の花器をあらわしているものがあります。図⑤

蓮華そのものの表現にも

中央がつぼみのもの 図②③⑤



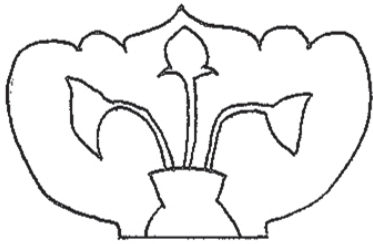
①松尾寺九重塔(米原町)



②寂照寺宝塔(日野町蔵王)



③光明寺七重塔(蒲生町蒲生堂)



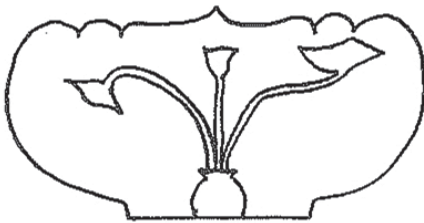
④小野神社宝塔(志賀町小野)



⑤明王院宝篋印塔(大津市葛川坊村町)



⑥梵釈寺宝篋印塔(蒲生町岡本)



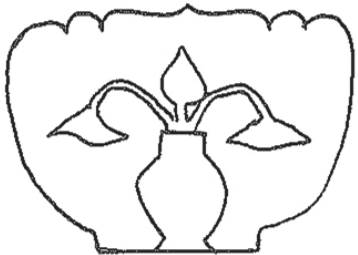
⑦梵釈寺宝篋印塔(蒲生町岡本)



⑧願王寺宝篋印塔(蒲生町大森)



⑨石塔寺宝篋印塔(蒲生町石塔)



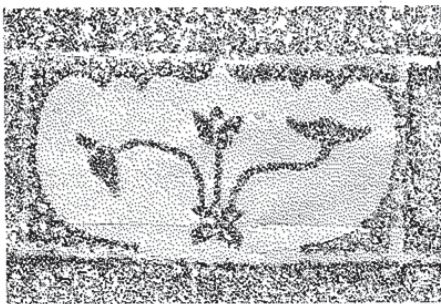
⑩雲迎寺宝篋印塔(日野町音羽)



⑪立善寺宝篋印塔(蒲生町合戸)



⑫苗村神社宝塔(竜王町綾戸)



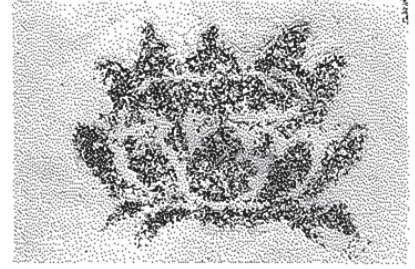
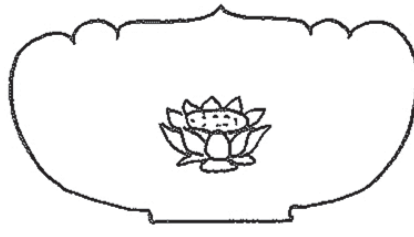
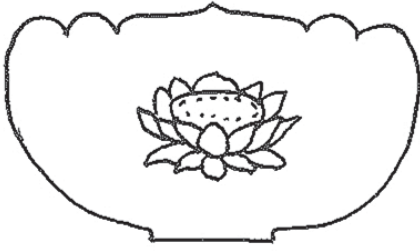
Ⓐ三茎蓮華拓影(石塔寺・蒲生町石塔)図⑦



Ⓑ三茎蓮華拓影(石塔寺・蒲生町石塔)図⑨



Ⓒ一茎蓮華拓影(石塔寺・蒲生町石塔)



⑬篠田神社宝篋印塔(近江八幡市上田町) ⑭比都佐神社宝篋印塔(日野町十禅師) ⑯開蓮華拓影(石塔寺・蒲生町石塔)

中央が開花のもの 図⑥A

中央が蓮の実になるもの 図⑦

に分けられ、その左右に何が配されるかによって、いくつもの種類の文様があります。

中央がつぼみで

左右とも葉 図⑧

左右に葉(左)と実(右)のもの 図④

左につぼみ、右に葉のもの 図⑨B

中央に花が開き

左右とも葉 図⑥A

左右につぼみと葉

左右に葉をつけるものが圧倒的に多く、葉の表現も幾種類もあります。

外向きと正面向きのもの

上向きと下向きのもの 図⑦A

上向き二枚のもの 図②

下向きと内側向きのもの 図⑧

外側向きのもの

下向きのもの 図⑩

これらのうち、上向きと下向きの二枚を対称的に配したものが多くあります。

三茎蓮華から変形したものに、中央がつぼみ、左右に長短各二本の茎に葉を出した五茎蓮華図⑪や左右二本の茎の花を対称的にデザインした二茎蓮華図⑫があります。

三茎蓮華こそ、近江石造文化の文様の中心

をなすもので、デザインの変化にとむものが多く、県下の各地で見ることができ、研究に恵まれたところです。

開蓮華 ハスの花が開いたところを、斜め上または横から見た形をあらわすものです。

開蓮華は三茎蓮華のような種々のデザインはなく、次の二種類に分けられます。

斜め上から見下ろしたもの 図⑬⑯

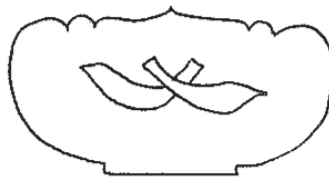
簡略化したもの

花卉の表現の仕方、側面と開蓮華の大きさの割合などが装飾の効果を左右します。開蓮華が面に対して大きいもの図⑬、形が小さいが蓮弁がすぐれているもの図⑭などあります。

一般に蓮の実を背後におき、前に数葉の弁を彫出したものが最も普通な文様です。

散蓮華 蓮の花を一片か二片散らしてあるもので、その使用例は非常に少なく、近江で10数例ぐらいです。石馬寺宝塔(五個荘町石馬寺)図⑮、梵釈寺宝篋印塔(蒲生町岡本)図⑯、八幡神社御旅所石燈籠(蒲生町市子殿)、石塔寺宝塔(蒲生町石塔)、西光寺宝塔(竜王町山之上)にあります。

永昌寺宝篋印塔(永源寺町箕川)の基礎四面の内、二面に相対向する散蓮を二葉飾っています。他の二面は文様がなく、数少ない散蓮ですから貴重な資料です。



⑮石馬寺宝篋印塔(五個荘町石馬寺) ⑯梵釈寺宝篋印塔(蒲生町岡本) ⑰散蓮華拓影(梵釈寺・蒲生町岡本)図16

孔雀 孔雀の立つ姿を横から見た形をあらわし、一面に二羽がむかひあうもの（鏡山宝篋印塔・竜王町鏡山、シリーズ86号）図⑰、一面に一羽をあらわしたもの（吉善寺宝塔・蒲生町鈴）図⑱、一面を二区に分け、一区に一羽あてをあらわしむかひあわせたもの（懸所宝塔・守山市金森町）図⑲の三種類があります。

また、孔雀のあらわし方に

翼をひろげ、上尾を立て、^{うぶ}羽毛を後に長く引くもの 図⑳

羽毛を引かないもの 図㉑

翼をひろげず、後に羽毛を引かないものの三種類があり、羽毛を後に長く引くものは滋賀県に多くみられます。翼をひろげないものは奈良県に見られるなど、地方の特色があります。

脚についても、左右ともまっすぐに立っているもの、片脚を曲げているものなど、さまざまあります。

大変珍しいものに、四面に三茎蓮華・散蓮華、開花蓮華・孔雀の文様を彫出している基礎があります。永源寺町高木にある浄福寺の宝塔で、全国に二例がわかっているだけです。

その文様は、孔雀は左向き一羽を大きく彫出、両翼を開いて羽ばたきし、片足はのびし

てふん張り、くちばしを開いて声を出している様子です。三茎蓮華は花瓶の全形をあらわし、中央の茎につばみをつけ、左の茎の葉は上向きに、右の茎は下にたれ、下向きの葉をつけています。開花蓮華は蓮の実をていねいにつけ、散蓮華は根元で交叉した二枚で、左葉が上に重なっています。

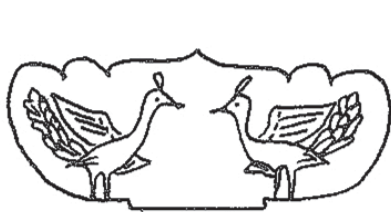
以上、四種の近江式文様をとりあげましたが、優劣さまざまあります。

ハスの原産地はインドであり、古代のインド人にとって、ハスは生命の創造する花でした。これが信仰にまで高められ、ついに極楽浄土では、すべての人びとがハスの花の上に仏として生まれ変わる、と信じるに至りました。

また、クジャクは熱帯の森林にすむ鳥で、毒蛇、毒草、毒虫を食べその毒を消す益鳥です。その上、色とりどりの羽で身を包んでいるから美しく、気高い鳥とされています。

このように、ハスやクジャクをもって墓塔の基礎文様にしたのはすばらしい知恵です。近江において発生し、これが西日本に伝播発展していったことと合せ考えると、石造文化は近江を抜きにしては語れないでしょう。

（池内順一郎氏提供）



⑰鏡山宝篋印塔(竜王町鏡山)



⑱吉善寺宝塔(蒲生町鈴)



⑲懸所宝塔(守山市金森町)



㉑孔雀拓影(石塔寺・蒲生町石塔)



㉒孔雀拓影(極楽寺・蒲生町石塔)



㉓孔雀拓影(梵釈寺・蒲生町岡本)